

今日の默想のてびき

週日聖書日課 エレミヤ書 2:4-13
2026年2月4日(水)

◆文脈と言葉

—エレミヤ書は、バビロン捕囚前後の激動期に、神の審判と回復の預言を語り続けた預言者の苦悩と召命が刻まれた書物です。神の言葉が受け入れられない孤独、そして絶望の中にある希望（新しい契約）という、預言者の生が深く描かれた預言書と言えます。

—民の罪は、異教礼拝、異教徒の混合、出エジプトの恵みの忘却などの形であらわれていました。

—この箇所の背景にある問題は、神との関係性の断絶です。民が神から離れ、「私に顔ではなく背を向けて……」（参照 27 節）状態になっていました。神の恵みによって選ばれ、救われるはずの民が、その恵みの源泉である神に背を向けたという、深い驚きと嘆きがにじみでる預言です。

◆默想のすじみち

(1)あらすじと説き明かし

—4-5 節：神は民全体に呼びかけ、嘆きの言葉をお語りになります。「あなたがたの先祖は、わたしにどんな不正を見いだして、わたしから遠く離れたのか」。先祖が始めた背信が今の世代も続いているのです。その世代を超えた不忠実による関係の破れを神は嘆いておられます。

—6-8 節：出エジプトの旅は恵みの出来事でした。神に文句を言う人はいなかったのです。しかしカナンの地に入った後民は罪を犯し始めます（士師記～列王記の時代）。祭司も律法の専門家も牧者も預言者も、主を求めず、むしろバアルというむなしい「神」に従った背信が告発されます。

—9-11 節：神は再び「私はあなたがたと改めて争う」と宣言なさいます。キティムやケダルという異邦の民でさえ自分たちの神々を変えたりしないのに（ましてや神でないものと交換したりはしない）、イスラエルは自分たちの真の神を、何の役にも立たないものと取り替えたという、驚くべき愚かさが告発されます

—12-13 節：天も震え上がるほどの恐るべき罪として、このことが二つの悪にたとえられます。第一に、命の水の源である主を捨てたこと。第二に、水をためることのできない、壊れた水溜めを自分で掘ったこと。主なる神を捨てること、神でないものを神とすること。民の罪の歩みは救いようのないものです。しかし、イスラエルが捨てた「命の水の源」である神は、御子イエス・キリストにおいてご自身を現してくださいました。キリストは十字架と復活によって、枯れることのない命の水を私たちに注いでくださるのです。